

# 研究ノート

## 農村で女が「生活を書く」ということ

—1945-1960年代の生活記録運動から—

つじ ともこ  
辻 智子

### < キーワード >

農村 女性 生活記録 生活 書く

### < 要 旨 >

学校や地域の青年集団、また工場労働者のサークルや公民館などでの婦人（若妻）学級、さらに社会教育主事などの働きかけや影響を受けながら、1950年代中頃より農村で女性たちも「生活を書く」ことを始めた。それは、当時の生活記録運動の昂揚とともにあったが、1960年代以降、それらが下火になるにともなって農村女性の書き綴るいとなみが浮き彫りになってきた。そこでは、自分のことや身の回りの生活場面が具体的に記述されたが、農村で女が「生活を書く」には、「秘密の守れる」関係性が成り立っていることが不可欠であり、彼女たちにとって「書く」ことは、自分と周囲との関係性を否応なく意識させられる作業となった。また、当時の農村において女たちの思考や思いが言語化される場はひじょうに限られていたと推察される。＜主体＞の声をどのようにしてより緻密にききとっていくことができるか、農村・農業と女性についての研究課題は、書かれた文章や発せられた言葉の文脈にとりわけ注意と配慮をばらう必要がある。

#### 1. はじめに—問題意識とその背景—

本稿は、農村・農業<sup>1)</sup>におけるジェンダーあるいは性別役割分業と性（セクシュアリティ）のありようをどう考えるのかという問題提起を展望しつつ、具体的作業として、日本の戦後（1945-1960年代）における農村女性の自己表現について問題整理を行うものである。

これまでの研究や論稿が描いてきた近代以降の農村女性は、過酷な重労働と家や地域社会からの差別を耐え忍んで生き抜くけなげさが強調されるか、あるいは「民主化」や女性解放の動きに対して相対的に「遅れた」存在として位置づけられてきた<sup>2)</sup>。農村・農業と女性をとりまく状況を分析すればするほど浮き彫りになるこの二極分解は、当の女性たちが発する声の「不在<sup>3)</sup>」から来ると考えることができる。ただし、ここでいう「不在」とは、もっぱら聞き手側の問題を示唆している<sup>4)</sup>。農村・農業におけるジェンダーあるいは性別役割分業と性の展開を考察するには、考察しようとする者が＜主体＞の声をどのようにしてより緻密にききとっていくことができ

るかが今後の課題であるといえる<sup>5)</sup>。

一方、農村の現状を見ると、農業の担い手あるいは女性起業家としてネットワークをはりめぐらせながら自分の納得する暮らしをつくりだそうとしている女性たちの動きや<sup>6)</sup>、家族経営協定の締結を通じて農業と家事をトータルにとらえ女性が担ってきた役割も家族を成り立たせる労働の一つと積極的に位置づける動きなどが注目される。しかし他方で、農外就労による女性の「見かけ上の地位向上」や[向井 1986 69]、固定的な性別役割分業意識の強固さ<sup>7)</sup>も指摘されている。こうした農村女性の内的矛盾と葛藤を、意識と行動の双方から理解するには、やはり＜主体＞の声により慎重に耳を傾ける必要がある。農村の女性は、婦人学級や地域婦人会、農協婦人部や生活改善実行グループなどフォーマルな「長期の活動前史<sup>8)</sup>」を持つと同時に、講やサークルなどインフォーマルな人間関係が重層的にからみあうなかに生きてきた。個人の内的矛盾や葛藤が表現されるのは、どちらかというと後者のサークルやその延長にある人間関係の場

や周囲の離村、村の過疎についても綴られている。

夫が出稼ぎ先から帰ってきたのは元旦の午後だった。またたく間に十日間が過ぎて、明日はいよいよ上京という夜、子供達も年寄りも寝てしまって静かなコタツに、私達は黙って入っていた。むこう3か月近く別れて暮らすのだ。せめてゆっくりした気分で語り合いたいと思ったのだけれども、夫はさっきから黙って後へ寄りかかり話しかけても、なんとなくつかかってくる。「お茶のむ？」と聞いても「いらん」とぶっきらぼうな返事が返ってくるだけ。私にはその原因がわかっていた。夫はもっと家で休んでいたかったのだ。いや出来るなら出稼ぎになど出たくないのだ。(中略)

私は無性に哀しくなって、けんかしてもめったに泣かない私が、涙が出てきた。私は意地っ張りなのか、人に涙を見られるのがきらいで、その時もコタツに顔を伏せていた。ちぐはぐな気持ちでくらすには3か月は長すぎる。(「その夜」32歳、昭和44年[妻有の婦人教育を考える集団 1976 44-45])

1950年代半ばから60年代の婦人(若妻)学級の変遷を、江田忠は次のように整理している。50年代半ばは、生活のことについて周囲の人たちと話をすることそのものが大変な喜びであり新しいことであったが、50年代末頃より、単なる「嫁」としての悩みや不満だけでなく「社会の矛盾」が綴られるようになり、さらに60年代に入ると、農業経営の担い手としての問題意識が現れる[江田 1967 118-130]。

このような婦人(若妻)学級から生まれた生活記録には、社会教育主事の影響力が大きい[江田 1973 102-103]。「書く」行為そのものと同時に生活記録の内容にも、「指導」的立場にある者の存在は、何らかの影響を与えていたと考えられる。

## (2)手紙のやりとりによる生活記録

個人的なつながりから生まれた生活記録文集として、『働く母 生活の記録』(1973年より『おんな 働く母の記録』と改題)がある。そこには、岩手県北上山地北部の岩泉町とその周辺の村に生きる女たちが、かつてそこで社会教育主事をしていた三上信夫に宛てて書いた手紙が収録される。文集は、三上が編集し、希望する女たちに郵便で送られた。1960年4月から現在に至るまで50集以上が編まれている。農業や生活のこと、家族の会話や出稼ぎの夫への思い、また、小さい頃のことや自分の結婚の時のこと、夜這いの習慣や「メンス(生理)」のことなどが書かれている。

ワタシノ カクノワ ロマジ(ローマ字)ノ ヨナモノデス。ソレヲ ヨクハンジテ ヨンデクレマシ。ワタシワ ガ(ッ)コ ニ ゼンゼン イ(ッ)タコトワ ナイデス。ワタシ十六ノトキ シジクイシ(零石町)ノ キクチキクエサン ト ユウ ムスメサン ト ナカヨシデシタ。ソノトキ、カタカナ ヤ ヒラガナ、ヨク テオト(ッ)テオセラレタ(おしえられた)モノデス。ソレカラ レンシュ(ウ)シテ コノクライカクヨ(ウ)ニ ナリマシタ・トテモ ウレシイノデ アノヒト ワスレラレナイ(岩泉町・昭和37年記、[三上 1996 268])

ここにも社会教育主事の働きかけが見られる。しかし、婦人(若妻)学級を地盤とする生活記録と異なるのは、手紙形式のため、互いの顔が見える地域場では言えないことを書くことができた点である。この場合、文集という場は、書き手の匿名性によって保障される集団性を形成していた。

## (3)地域サークルの生活記録

広島県備後地方では、1960-1972年にかけて文集『みちづれ』が編まれている。広島県府中市立図書館の読書会がきっかけとなり、50年代より府中市を中心に8つほどの読書グループが生まれていた。1960年に開かれた読書発表会の折、各グループの交流の場として文集をつくることが提案され、読書会は備後読書サークル協議会となって(1964年からは「みちづれ会」と改名)、文集『みちづれ』と月報『みちづれニュース』を発行するようになった。そこには、各読書会の現状報告や本の紹介だけでなく、半生や戦争体験、結婚や夫婦・性のこと、日常生活のこと、子どもの教育のこと、農作業・農業経営のこと、村の生活様式などが綴られるようになった。年齢や生活環境が同じような人どうしのグループを基盤にしつつ、文集紙上でグループ間の交流と共有が行われたため、似たような人との話しあいの場とさまざまな境遇の女たちとの出会いの場の両方を持つことになった。農村部の「姑」世代、「娘」「嫁」世代、都市部の商家の「嫁」、サラリーマンの「主婦」、会社づとめの女たちが、グループをつくり、話をし、そこで出たことを文集に書いた。

会合に出て、いろいろの話を人に聞いてもらえる時は嬉しいことはありません。他の人の苦労話も聞かせて貰い、お互いに口には出さねど、同じ道を、そして同じ苦労をしている人も、数あることを学び知った時、私は一人ではないんだ、共通したものが、夫々の心の中に流れているんだ、ということが話しあってみ

自分のおかれている状況を突きつけずにはおらなかったであろうことが推察される。つまり、書かれたものや内容だけでなく、「生活を書く」（あるいは「書こうとする」）行為そのものが、もうすでに自分と周囲の関係を否応なく意識させる作業にならざるをえない。60年代に入っても細々と続けられた農村女性の生活記録のいとなみの奥には、そうした書かれていない思いや葛藤が渦巻いていることが想像される。

## 5. まとめにかえて

学校や地域の青年集団、また工場労働者のサークルや公民館などでの婦人（若妻）学級、さらに社会教育主事などの働きかけや影響を受けながら、1950年代中頃より、農村女性は「生活を書く」き始めた。それは、当時の生活記録運動の昂揚とともにあったが、60年代以降、他の動きが沈静化するなかで農村女性の書き綴るいとなみがしだいに浮き彫りになっていった。そこでは、自分や周囲のことについて生活場面の展開を具体的に記述する形で綴られたが、書けば書くほど書けないことに向きあうことになった。農村で女性が「生活を書く」には「秘密を守る」集団の関係性が求められたが、それは同時に、「生活を書く」ことそのものが自分と周囲との関係性を意識する作業となることを意味してもいた。

これらが示唆するのは、農村において女が自らの思いを文字化する場はひじょうに限られていたこと、したがって彼女たちの抱える矛盾は文字化されずに、あるいは公開されずに存在したのではないかということである。矛盾と葛藤に折り合いをつけながら生きてきた農村の女性たちの歴史は、「活動前史」であるとともに、言葉や文字よりも、直接の実践や行動となって現れやすいという農村における女性の特徴を形成してきたとはいえないだろうか。

近年の女性学やジェンダーへの研究関心の高まりに対して、農村女性や農業とジェンダーへの注目は相対的に低いように思える。「開発と女性（WID、GAD）」の視点から海外については研究も多いが、日本の農村と女性をこれらの視点でとらえ直す作業はほとんど行われていないのではないだろうか。日本農村の「嫁不足」と「アジアからの花嫁」の問題性が指摘された折、「この問題は、日本の農村の女性の問題なんだ」という認識があった<sup>18</sup>。しかし、女性問題やジェンダー研究者による「農村の女性の問題」の言及は、その後もあまり多くはない。日本の農村の女たちの存在は、「開発」「近代化」の問題と女性問題を同時に見すえるジェンダー研究の必要性を提起していると言える[中道 1995 155]。また、農村における女性たちの行動や実践は、女性問題（ジェンダー）

をめぐる学習活動や「一人一人が力をつけること」の具体的な経験としても多くの示唆に富んでいるということが出来る。

（お茶の水女子大学大学院）

## [注]

- \*1 農林漁業のいとなみを身近に感じ、家が地域の単位となっているところを、ここでは漠然と「農村」と呼んでいる。また「農業」には、産業としての農林漁業と国家の農業政策、さらに伝統的な農山漁村の暮らしのなかに溶けこんでいる農的ないとなみと、その自然観・労働観・世界観などの意味をこめている。
- \*2 日本の女性史研究の展開は、「発展」「進歩」の枠組みのなかにある「解放史観」「抑圧史観」と「女性＝弱者・被害者」の構図を持つ生活史・民衆史の二方向からのアプローチが指摘されている[上野 1995 165]。
- \*3 1970年代のウーマンリブが自らを自らの言葉で表現することに執着したことに注目したい。
- \*4 女性たちに寄り添い、その認識や運動の変遷を伝統文化と関連させて描き出す地域女性史や[堀場 1990]、綿密な聞きとりによる研究も現れてきている（細谷1993など）。
- \*5 一条ふみや山代巴の仕事に見られるように、農村女性を描いた小説（随筆）は、こうした問題をかなり克服していると考えられる。
- \*6 福井県で酪農業を営む女性の呼びかけで生まれた「田舎のヒロインわくわくネットワーク」は、1996年に東京で全国交流会を開き、農業に従事する女性たち約400人が集まって、各々の経営状況などを報告し将来の夢を語りあった。彼女たちは、持ち回りで『田舎のヒロイン通信』を発行し、それぞれの近況や思いを書きあっている。従来の組織とは関係のないところで、このように女性たちが独自につながりを広げていく動きが、近年目立っている。
- \*7 農村女性たちが実力をつけている一方で意思決定の場に参画しないことを、市田は、「農家婦人の地位向上」と「女性の地位向上」との断絶と指摘している[市田 1995 132]。
- \*8 農村女性起業家の「主体性発揮」に関して、岩崎は、農協婦人部や生活改善実行グループなどの「かなり長期の活動前史」を彼女たちの多くが持っていることに注目している[岩崎 1995 184-185]。「主体性発揮」という意味では、戦時下の婦人会活動など敗戦以前との連続性も考えられる。

- 研究学会編『年報村落社会研究31 家族農業経営における女性の自立』農産漁村文化協会、pp135-166
- 野田公夫 1990「農地改革と農民的土地所有に関する覚書」三好正喜教授定年退官記念事業会編『小農の史的分析＝農史研究の諸問題』富民協会
- 沢井余志郎 1954「『母の歴史』ができるまで」鶴見和子・木下順二編『母の歴史』河出新書、pp132-161
- 須藤克三 1959「農村青年の生活記録サークルー底辺からの文化革命－」『文学』10月号、pp73-82
- 妻有の婦人教育を考える集団編 1976『豪雪と過疎と新潟県十日町周辺の主婦の生活記録』未来社
- 鶴見和子・木下順二編 1954『母の歴史』河出新書
- 鶴見和子編 1954『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社
- 鶴見和子 1955「わたしたち自身のこととして」（『母の歴史』事件）『知性』9月号、pp66-68
- 鶴見和子 1968「家庭における婦人の役割変化（下）－戦中・戦後の比較」『思想』No.527、pp114-134
- 鶴見和子 1986「生活記録運動の戦後と現在」『国民文化314』1月号、
- 植松要作 1962「生活記録の新しい発展のために」『日本の記録』第4号、pp36-38
- 上野千鶴子 1995「歴史学とフェミニズム－『女性史』を超えて」『岩波講座日本通史別巻1 歴史意識の現在』岩波書店、pp149-184
- 山代 巴 1969「苦難の時期をささえたもの」『武谷三男著作集第6巻』剋草書房
- （山代巴『連帯の探求』未来社、1973、pp221-339所収）
- 山崎洋子 1988『われら田舎のヒロインたち』おけら企画

- \*9 近代的土地所有権の発想に裏付けられた農地改革を、「解放」の側面からだけではなく、共同体論的視点や村落の自治、資源・生産・消費の有機的な循環体系の視点などから、批判的かつ将来展望を模索する立場に立ってとらえ返そうとする動向がある。
- \*10 農業・農村研究にジェンダー視点を介入させることは一つの大きな課題である。
- \*11 このグループが「母の歴史」を書くようになったのは、『歴史評論』紙上で、有名人だけでなくそれぞれの母がどのように生きてきたのかということが歴史である、だから自分の母の歴史を書こう、と呼びかけられたことが直接のきっかけになっている。ふるかわおさむは、「母の歴史を書くことは、幾重もの重圧の中で、生活のために生き抜いてきた日本女性の歴史をつづることになります。一人一人の母の歴史を明らかにしていくこと。そしてそれらが集積されてゆくと日本の母たちの、日本の女性の歴史がつくられてゆくことになります」と書いている（ふるかわおさむ 1953『「母の歴史」を書こう』『歴史評論』5月号）。
- \*12 文字文化が自己と他者、時間や空間を分節化していくのに対して、それらの境界を悠々と越えていくオーラルな世界の豊かさも指摘される。農村の女性たちのなかにはオーラル文化に生きる人も多いと推察されるが、「生活を記録する会」の場合、すでに中学校までの学校文化である種の文字文化を身につけてきており、「概念くだき」は文字文化のなかでの「書く」ことへの認識変容を促したと考えられる。
- \*13 「民主化」を掲げる労組のなかの矛盾、「封建的」とされる農村のなかの魅力を、1950年代後半になって自分の将来の問題を考えるなかで彼女たちは書き綴っている。「男の人は、自分のまわりの人に解放された女性、なんでもはっきり言うことのできる人、なんて言ってその反対の人を好きになる場合がな。だから、今の女の人たちは、よくなればよくなるほど、ヘンにされてしまうってこともあり…」と、労組幹部や活動家の女性に対する言動の不一致を指摘している（生活を記録する会『なかま』16、1957、p50）。
- \*14 鶴見和子は、「職場のサークルはつぶれてしまったし、農村の青年・婦人サークルは行政にとりこまれてしまった」と述べ、50年代後半を「停滞期」、60年代を「沈滞期」、そして70年代を「再生期」と総括している[鶴見 1986]。
- \*15 「山脈の会」など。
- \*16 1960年代から70年代初頭にかけて公民館の婦人学級で編まれた文集を、公民館・学校・教育委員会・大学関係者でこの地域の社会教育の仕事に何らかのかかわりを持っている人たちが抜粋して編集。編集者集団（＝妻有の婦人教育を考える集団）は、男性11人、女性2人のあわせて13人からなる。ほとんどが町や市の社会教育主事である。
- \*17 ここで言われる「社会の矛盾」として、例えば都市的近代家族をモデルとする女性の役割（子育てや料理の仕方など）を十分に果たせていない問題などが綴られている。
- \*18 『むらの国際結婚事情 第二回結婚問題スペシャリスト講座報告書』財団法人日本青年館結婚相談所、1988、p41

#### [引用・参考文献]

- 江田 忠 1967「東北農村婦人の生活と学習にみる変容と停滞」三井為友編『婦人の学習』東洋館出版社、pp116-139
- 江田 忠 1973「生活記録運動」碓井正久編『社会教育の方法』東洋館出版社、pp100-109
- 堀場清子 1990『イナグヤナナバチ』ドメス出版
- 細谷昂 1993「農村女性と家」細谷昂ほか『農民生活における個と集団』御茶ノ水書房
- 市田（岩田）知子 1995「生活改善普及事業に見るジェンダー観」日本村落研究学会編『年報村落社会研究31 家族農業経営における女性の自立』農産漁村文化協会、pp111-134
- 一条ふみ 1978『永遠の農婦たち』未来社
- 岩崎由美子 1995「農村における女性起業の意義と方向性—農村の女性起業実態調査を通じて—」日本村落研究学会編『年報村落社会研究31 家族農業経営における女性の自立』農産漁村文化協会、pp169-190
- 真壁 仁 1963「農民の歴史をつくる青年の創作活動」『社会教育』11巻5号、pp61-65
- 丸岡秀子・大島清編 1969『現代婦人問題講座3 農村婦人』亜紀書房
- 三上信夫 1965『埋もれた母の記録』未来社
- 三上信夫 1986『おんなの苦闘史』彩流社
- 光岡浩二 1995「女性の職場としての農業・農村」『農林統計調査』11月、pp4-8
- 向井承子 1986「婦人の農外就労」丸岡秀子監修『変貌する農村と婦人』家の光協会
- （引用は、井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編1994『日本のフェミニズム4 権力と労働』岩波書店、pp63-74）
- 中道仁美 1995「農村女性研究の展開と課題」日本村落

てはじめてわかりました。(農宗富美枝「読書会と私」『みちづれ』第1集、1960)

とりわけ農村の女たちにとっては、まず家を出て会合に行くこと、そしてそこでなかまと話しあうこと、そのこと自体がこれまでにない経験であり、「書く」ことは、なかまのなかで話すことに導かれて自発的にはじまっている。しかし、地域に密着しているため、「書く」ことで、周囲の「思わぬところから横やりが入って書けなく」なることもあったと告白されている(林直子「重傷」『みちづれ』第8集)。

#### (4)工場から生まれたサークルその後

50年代半ばに紡織工場で「母の歴史」を書いた生活記録サークル「生活を記録する会」は、1960年以降、工場を辞めて各地へ散った当時のなかまが、その後の互いのことを伝えあうために通信・文集を出し続けている。かつて、農村の母の歴史を書き、「母の歴史をくり返さない」を合い言葉にしていたこの女性たちにとって、村で女として生きるということは、特別な意味を持っていた。「出稼ぎ」意識の強かった彼女たちは、「進歩的百姓娘」として工場でのサークルの経験を村の生活で生かすために村へ帰ろうとするが、農業の厳しさと農村・農家での女の「生きにくさ」を知っているため、「村へ帰ってがんばる」と言いながら、同時に「帰りたくない」「このまま誰かいい人がいたら、結婚して町に残りたい」という気持ちとの間で葛藤することになった。結局、結婚して都市に残るもの、村へ帰るものとさまざまな道を歩んでいくことになったが、各々の場で「母の歴史をくり返さない」ために、今も書きあつて励ましあっている。

#### 4. 農村で女が「生活を書く」ということ

1950年代、工場労働者の生活記録サークルで自分の生活や職場のことを「ありのまま」に書くと、いやがらせをされたり昇級・昇格に不利になったりクビになったりするなど生活がおびやかされることから、「ありのまま書くとはどういうことか」「おとなはありのまま書くことができないのか」という問題提起がなされた[鶴見 1955 66]。農村青年のあいだでも、「ほんとうのこと」を書けば書くほど「圧迫や障害にぶつかる」、だからこそ仲間どうしが「強くむすびつく」ことが大事、「書くことはたたかい」なのだという議論がされた[真壁 1963 61]。

農村で女が「生活を書く」場合にも、「ありのまま書けない」状況があった。1950年代後半から60年代初頭の農村女性について、「とじこめられた『家』の中からきわめて遠慮ぶかく自分の声をかきつづっている」「匿名

であつてさえ、書いてだけでどこの誰かが知れてしまうので、『もう絶対にかかない』『もっとも人に告げたいことばを心の奥深くいんべいするようになった』と述べられている。[植松 1962 37-38]。

農村に暮らし、自らも女性のグループをつくって活動していた山代巴は、村の女たちが本当に言いたいことを言いあい、書きあうには、まず「秘密を守るふところになること」が不可欠だったと指摘する[山代 1969 275]。山代は、「秘密を守るふところ」になれなければ、「家や地方権力からの自己解放」はありえないとし、「民主化をはかるものさし」の一つとして、これを重要視した。「誰にも言わないで」と打ち明けたことが左から右へつつ抜け跳ねかえって煮え湯を飲まされること、婦人会活動の場も「家の外で何か言おうとすると、すぐあとで返ってくるから言えない」「本当に苦しんでいる人の発言の場とならない」こと、そして「真実のことで人の悪いことを書くと村では暮らしにくく」なること、「これだけは公表できない、ということの中に、その人が一番うったえたい問題がある」ことが、女たちをとりまく村の現実だった[山代 1969 250]。

敗戦までは自己表現のためにものを書くなどということの許されなかった農家の嫁が、自分の心の最も奥深い痛みをあらわすようになるためには、家族的な権力の全く外で秘密の完全を守るグループを持つことが必要で、そこで、口ではいえないことをも書き、仲間との助け合いの討議でそれを他人にも読めるようにして行き、発表の場もどこの誰のかわからぬようにするという周到さが必要です [山代 1969 275]。

戦後の生活改善普及事業で推奨された共同耕作や家計簿記帳運動に対し、「村落共同体の基点をなす人間関係の構造そのものを、つくりかえつつある」という見方[鶴見 1968 130]がある一方で、山代は「家の収入支出など、うかうか隣組で公表できる筋合のものとは思えない」と、村のなかでの「共同化」の難しさを指摘している[山代 1969 252]。

これらのことから分かるのは、「生活を書く」場や集団のありようが、「書く」ことに大きく影響する、とりわけ農村女性の場合は重大だという点である。そして当然のことながら、読み手には、それがどのような文脈で書かれたのかを注意深く読みとり、慎重な配慮をもってその書かれたものを受けとめる力量が求められる。農村の女性たちが「生活を書く」には、「秘密」を言いあえる関係、または「どこの誰だか分からない」状況が不可欠だった。しかし、これらのことは、彼女たちに対して、

においてであった。「生活を書く」ことにおいても、時代・社会状況に対応して運動として昂揚した1950年代中盤よりも、息長く細々と続けられた1950年代後半から60年代の生活記録のなかに、その一端を垣間見ることができる。

また農村・農業研究においては、戦後農地改革や農政を再検討する動きのなかで<sup>9)</sup>、女性がおかれていた状況とそこからの解放を進める力を見据えながら、同時に村の論理や自治の歴史と女性とのかかわりを見直していく視点を導入する必要がある<sup>10)</sup>。

以上の問題意識から、本稿は、農村女性が戦後の農村でどのように「書いて」きたかを探ることを試みる。農村で女が「生活を書く」とはどういうことだったのだろうか。戦後の生活記録運動に着目しながら、それと女性のかかわりを確認した上で、農村で女性たちによって続けられた生活記録運動の特徴を整理していこう。

## 2. 戦後の生活記録運動の展開と女性

1946年頃から、栃木県や山形県の農村で青年たちが、生活のなかで気づいたことを書きとめ文集をつくりはじめている[須藤 1959 73]。

何も固苦しく考えないで、文章はまとめるものという考えをすてて、いろいろばたで、普通おっつあやおっかあといっしょに話していることのなかに、はっとするほど大事な問題がふくまれているものだ。そのとき、言ったままの言葉で、どんな紙きれでもよいからえんぴつでちょっとかきとめておくなよ[須藤 1959 74]。

1940年代後半は、学校や地域でこうした「書く」といとなみが展開された。50年代に入ると、学校的生活綴方実践が注目を集め、それに触発された労働者が工場のなかで書きはじめた。そこには、中学卒業後、農村から都市に「出稼ぎ」に来ていた紡織工場の女性たちが多くいた。彼女たちは、工場に来るまでの村の暮らしや工場での生活を綴り数々の文集をつくっている。

『母の歴史<sup>11)</sup>』を編んで注目を集めた東亜紡織泊工場の「生活を記録する会」では、生活綴方との出会いを通じて「書く」ことの認識が変わったことが明らかにされている。1950年前後は、少女小説や労働者文学を真似たり、また労働組合のスローガンのような文章を書いていた。けれども、『山びこ学校』（無着成恭編、1951、青銅社）に出会って、「なんだ、こんなことを書いたらいいのか」「こういうことなら、私の家にだって、どこにだってあることだ」と思いなおすようになった。家や工場生活のことを自分がふだん使っている言葉で具体的に書

くようになった彼女たちは、1952年8月の第1回作文教育全国協議会に参加し、自分たちの生活綴方の経験を話した。なお、この協議会以後、学校外での「おとなの生活綴方」が「生活記録」、「生活を書く」とこととその集団の活動が「生活記録運動」と呼ばれるようになった。

1950年代の生活記録運動としてしばしば取りあげられるのが、東京の主婦を中心とした「生活をつづる会」である。1953年に鶴見和子と牧瀬菊枝が呼びかけて生まれたこの生活記録サークルは、『エンピツをにぎる主婦』（1954、毎日新聞社）、『おかあさんと生活綴方』（1957、百合出版）を発行し、それまでものを書くということのほとんどなかった女たちが鉛筆を持って自分や家族のことを書きはじめたことを社会に印象づけた。1950年代半ばには、婦人学級・若妻学級、婦人会、PTAなどで文集が編まれたり、新聞への投書から「草の実」などのサークルが生まれたりしている。

生活記録運動が生活綴方に学んだエッセンスの1つは「概念くだき」である。「生活を記録する会」にそくして言えば、「いつ、どこで、誰が、何を」を書こう<sup>12)</sup>という形で受け入れられた。「封建」対「民主」という二項対立的な関係が社会の意識を規定していた時代のなかで、「生活を記録する会」の女性たちが、「民主的」とされるものの中にある抑圧性や、「封建的」とされるものの中にある解放性を感じとり共有しえたのは、この「概念くだき」による表現方法を手に入れたことが大きかったといえる<sup>13)</sup>。

50年代後半になると、生活記録運動はそれまでとは形態を変える<sup>14)</sup>。農村から都市へ向かう者が急増する一方、職場サークルは解体した。若干の事例<sup>15)</sup>を除けば、女性とりわけ農村女性の生活記録運動以外ほとんど報告されなくなっていく。

## 3. 農村女性と生活記録運動— 2, 3の事例に見る—

1960年代以降のいくつかの文集から、農村で女たちが「生活を書く」といとなみをこつこつと積み重ねていたことを知ることができる。2,3の事例にそくして見てみよう。

### (1) 婦人（若妻）学級から生まれた生活記録

『豪雪と過疎と 新潟県十日町周辺の主婦の生活記録』（妻有の婦人教育を考える集団編、未来社、1976）には、約90の生活記録が収録されている<sup>16)</sup>。この本は、60年代に公民館の婦人学級で編まれた生活記録文集をもとにしている。そこには、出稼ぎに行く夫を送り出す不安、雪に埋もれる冬を夫なしで乗り越える心ぼささ、雪かき・雪おろしの苦労、夫の無事への祈りが綴られる。機織り